

観賞ニグルベローヴァと米良良一の

「ドゥエットの夕べ」

盛田 常夫

10月5日、オペラハウスの演物。全盛期を過ぎたとはいえ、当代を代表するコロラトゥーラ・ソプラノ歌手が日本人歌手と共演するというので、会場は多くの在留邦人を含め、満席。そうでなくてもハンガリー人の血が混ざっているグルベローヴァの人氣は高く、コンサートはいつも熱狂的なファンで埋まるが、今回はとくに希少価値となつたカウンター・テノールとのドゥエットとあって、前評判は上々だった。「メトロポリタンでも観賞できないプログラム」と期待する観客の会話に思わず苦笑した。

ソプラノとカウンター・テノールのドゥエットと曲は数多くなく、パツ

ハやヘンデルの作品が中心。今ではめつたに聞けないプログラムで、珍しさも伴って、満喫できた。米良の声質からして、静かに奏でる古典的なカンタータが良いのだろう。

後半のロッシーニのオペラでは米良がアルト部分を歌うことになるが、こうなると音域の広さは感じられるが、声量の不足がはつきりする。もっと力のあるテノールが聞けるのかと思つてしたが、ここはやや期待外れ。体が小さいので、声量に絶対的な限界があるのだろう。オペラでは声量だけでなく、見栄えも要求されるから、体が小さい日本人は出演の機会が限られるだろう。だから、この種のコンサートの方が力量を訴える場として相應しいといえる。

やっぱり庄巻はグルベローヴァの十八番中の十八番、「ルチア」。「狂乱の場」のアリアは昨年のリサイタルに続いて2度目だが、何時間聞いても聞かせる。その場ですぐにアンコールとなった。パワーで押すマルトン・エヴ

ァとは対照的に、繊細に歌い上げるコロラトゥーラは何時間聞いても心地よい。ワーグナーのマルトンとドニゼッティのグルベローヴァはあらゆる面から対照的だ。この二人を比較すると、ソプラノのまったたく違った音質とテクニクがはつきりするから、興味深い。ちなみに、マルトンは新春の「ニーベルングの指輪」の第4日目「神々のたそがれ」に出演の予定。

グルベローヴァはハンガリー人の母とドイツ人の父をもつスロバキア出身の歌手。日常会話程度のハンガリー語を話す。指揮を担当していたのがご主人。で、一緒になって、名の知れない「ナイチンゲール」というグルベローヴァ専属のレコーディング会社のCD製作をおこなっている。春には、コングレスホールで「コウモリ」のライブ・レコーディングがあった。ハンガリーは人件費や会場費が安いからだろうか、今回もハンガリーの混成オケを使って、ライブ・レコーディングとなった。

宿泊した宿がオペラ近くの4つ星のペンション・ホテル。1泊140マルクほどの宿だ。5つ星のホテルに長期滞在して憚らないどころのビジネスマンと違い、文句を言わないところが偉い。というか、これが欧米のふつうの感覚かも。ここは見習いたい。以前にブリュッセルでジョージ・シヨロシュとハンガリー関係の会議で一緒になった時のことだ、彼は他の参加者と同じビジネス・ホテルに宿泊していた。ヘッジファンドの総帥でも、無駄なお金は使わないというのは流石。公的資金を受け入れるところは心して欲しいものだ。

でも、誰がこのプログラムを企画したのだろう。来年からこの二人がヨーロッパツアーの予定というから、趣味の悪い3大テノールに嫌気がさしている聴衆に訴えるのだろうか。